

目次

- [はじめに](#)
 - [推奨ステップ](#)
 - [ベストプラクティス](#)
- [準備](#)
- [基礎編](#)
 - [Go Agentのインストールと設定](#)
 - [エージェントのログ出力](#)
 - [\(オプション\) 環境変数による設定](#)
 - [最初の計測](#)
 - [カスタム属性や特別なトランザクション](#)
 - [より簡単に計測する](#)
 - [segmentsの導入](#)
 - [外部呼び出し](#)
- [発展編](#)
 - [ログ出力](#)
 - [Logs in Context](#)
 - [エージェントのログをIntegrationで出力する](#)
- [リンク](#)

はじめに

New Relic Goエージェントは他のNew Relicエージェントとは異なり設定不要の自動インストールメンテーションを行います。Go 言語の性質上、Java、.NET、Node.js、PHPなどが持っている動的なランタイムやメソッドの置き換えをGo は許可していません。これには独自の利点がありますが、それゆえGoアプリケーションを監視するにはコードの変更が必要です。肯定的に捉えると、コードの中で何を計測するかを100%制御でき、高度にカスタマイズ可能です。隠れた、奇妙な、あるいは意地悪なサプライズはありません。

さらに、New Relic Goエージェントにはパッケージの依存関係やバージョンがありません。Go開発者なら誰でも、Goエージェントに直接変更を加えることができます。このGoマスタークラスは、ベストプラクティス、レコメンデーション、コードデザイン、ガイドラインを集めたものです。このプログラムは、当社のNew Relic Goチームと大規模な本番環境で動作するGoアプリケーションを対象としています。基本的なセットアップ、最初の関数のインストールメント、ラッパーの記述から始めることができるように設計されています。ミドルウェア、分散トレース、gRPC、Logs in Context(LiC)などの新機能にも焦点を当てています。

これらは、Goアプリケーションをより早く使いこなすためのアドバイスに過ぎないことにご注意ください。これらNew Relic Goエージェントの機能の使用方法については、自由に変更してください。お客様の環境に合わせて最適なものをお選びください。

推奨ステップ

- GitHubの「Getting Started Guide」から始めましょう。アプリをインストールする前に、提供されている残りのGoドキュメントと参照リンクを参照してください。
- 「[発展編](#)」セクション、特に「セグメント」のトピックを試す前に「[基礎編](#)」セクションの全てを確認してください。

- GoアプリがNew Relicで正常に監視されると、[カスタム属性](#)を使用してより意味のあるデータを取得することができます。
- New Relic APMエージェントに[Kubernetesのメタデータ](#)を注入することもできます。

ベストプラクティス

- New Relic Goエージェントは5秒ごとにデータを送信していますが、UIにデータが表示されるまでに時間がかかります。動画にあるように、Goアプリをテストする際には、より多くのデータを生成することをお勧めします。
- 重要なキートランザクションを取得するために、モジュール式で拡張性があり、拡張性のあるラッパーを設計するのに時間をかけるのがベストです。
- アプリの最も重要な部分のみをインストルメントすることをお勧めします。Goアプリのすべての部分をインストルメントするのに膨大な時間を費やしてしまうと、時間を無駄にしまいます。重要なものだけをインストルメントしてください。
- 覚えておくべき重要なセグメントは3つあります：基本セグメント、外部呼び出しセグメントとデータストア・セグメントです。
- Goセグメントを開始するたびに、Goセグメントを終了することを忘れないでください。
- Goで分散トレースを使用して、他のプログラミング言語で書かれた既存のアプリケーションと接続することができます。Logs in Context (Go) を利用するためには、既存のログ転送装置が必要です。
- 重要> Go Agentの初期テスト段階でデフォルトの [Apdex 値を 0.001に設定](#) してください。アプリケーションが運用フェーズに入ったら、運用環境の値を反映するようにApdex の設定を再確認します。

準備

- goの開発環境 (この手順書はv1.14.2を使って動作確認しています)
- New Relic APM Proを有効にしたアカウント。ライセンスキーを取得して参照できる様にしておいてください。

基礎編

Go Agentのインストールと設定

New Relic Go Agentの最新メジャーバージョンは3です。バージョン3よりモジュール化されています。今までのバージョン指定のないパスは互換性のためにバージョン2を参照するので、バージョン3を利用する場合は github.com/newrelic/go-agent/v3/newrelic と指定する必要があります。

New Relic Go AgentはHTTPのルーティング(webサーバー)、データベース呼び出し、その他のSDKを計測するためにそれぞれに対応するIntegrationライブラリをだしています。基礎編ではそれらのライブラリを使わず、シンプルなものを書き下す形から始めます。これにより、Integrationライブラリの適用の仕方がわかりやすくなると共に、ライブラリの利用方法がNew Relicの提供する手順と異なっていたり、提供していないライブラリを利用していたりする場合に、計測のためのコードを書くことができるようになります。

さて、まずシンプルなWebサーバーを `./lab1/main.go` に用意しています。この中には、sleepして応答するだけの `index` と `hoge` という2つのエンドポイントと、外部サービスを呼び出す `external` というエンドポイントがあります。これを計測するのが基礎編の目標です。計測したい内容は次の通りです。

- エンドポイントごとに呼び出し数と処理時間を計測する
- `customerLevel`というクエリ文字列で渡される顧客クラスをエンドポイントの統計に追加する(クエリ文字列を使うのはブラウザでテストしやすくするため)

- hogeエンドポイントでは無名関数内の処理の経過時間を個別に計測する
- 外部呼び出しを計測する
- エラーが発生した時に記録する

`./lab1/main.go` を編集して作業を進めるため、最初の内容を確認したい場合は `./lab1_materials/main.go.start` を参照してください。

それでは早速始めましょう。まずはGo Agentを設定してAPMのUIにアプリが表示されることが目標です。

まず、`github.com/newrelic/go-agent/v3/newrelic` をimportに追加します。またこの後利用するので、`os` も追加します。

```
import (  
    //略  
    "os"  
    "github.com/newrelic/go-agent/v3/newrelic"  
)
```

`main` 関数の先頭でGo Agentを初期化します。そのためには `newrelic.NewApplication` を呼び出します。 `newrelic.Config` を引数にとる関数を引数として可変長にとることができます。アプリ名とライセンスキーを設定する場合次の様にかけます。

```
newrelic.NewApplication(func (cfg *newrelic.Config){  
    cfg.AppName = "GoMasterLab1"  
}, func (cfg *newrelic.Config){  
    cfg.License = os.Getenv("NEW_RELIC_LICENSE_KEY")  
})
```

ここでライセンスキーをソースコードに埋め込まないようにするため、環境変数経由で設定しています。もちろん、一つの関数の中で両方設定することもできます。

```
newrelic.NewApplication(func (cfg *newrelic.Config){  
    cfg.AppName = "lab1"  
    cfg.License = os.Getenv("NEW_RELIC_LICENSE_KEY")  
})
```

またアプリ名やライセンスキーといったよく使われる設定項目については、`newrelic.ConfigXXX` という関数が用意されています。今までのコードは次の様に書くことができます。

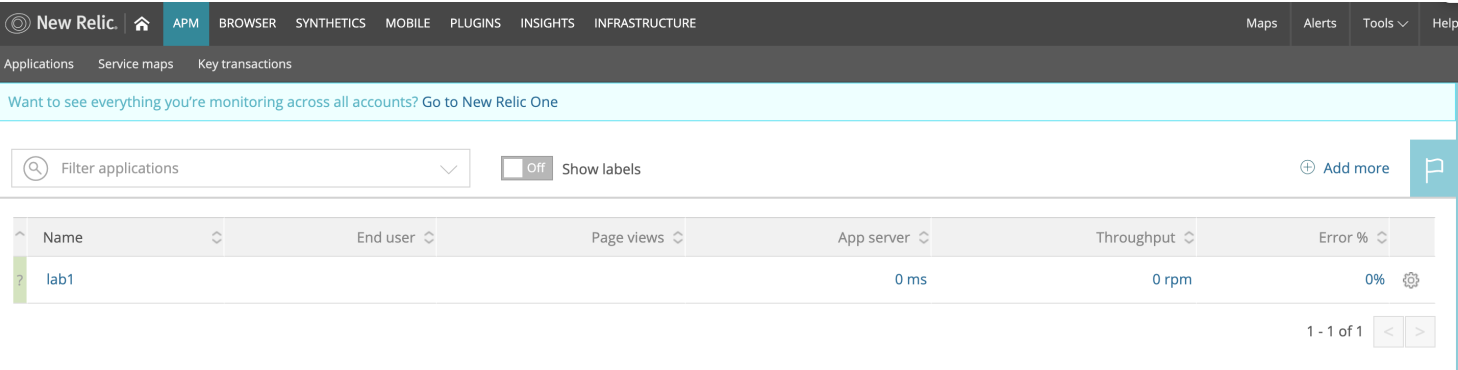
```
newrelic.NewApplication(  
    newrelic.ConfigAppName("lab1"),  
    newrelic.ConfigLicense(os.Getenv("NEW_RELIC_LICENSE_KEY")),  
)
```

この関数が使える項目はこちらを利用し、そうでない設定項目や動的に切り替えたい項目を上の書き方で書くのと組み合わせるのが良いでしょう。

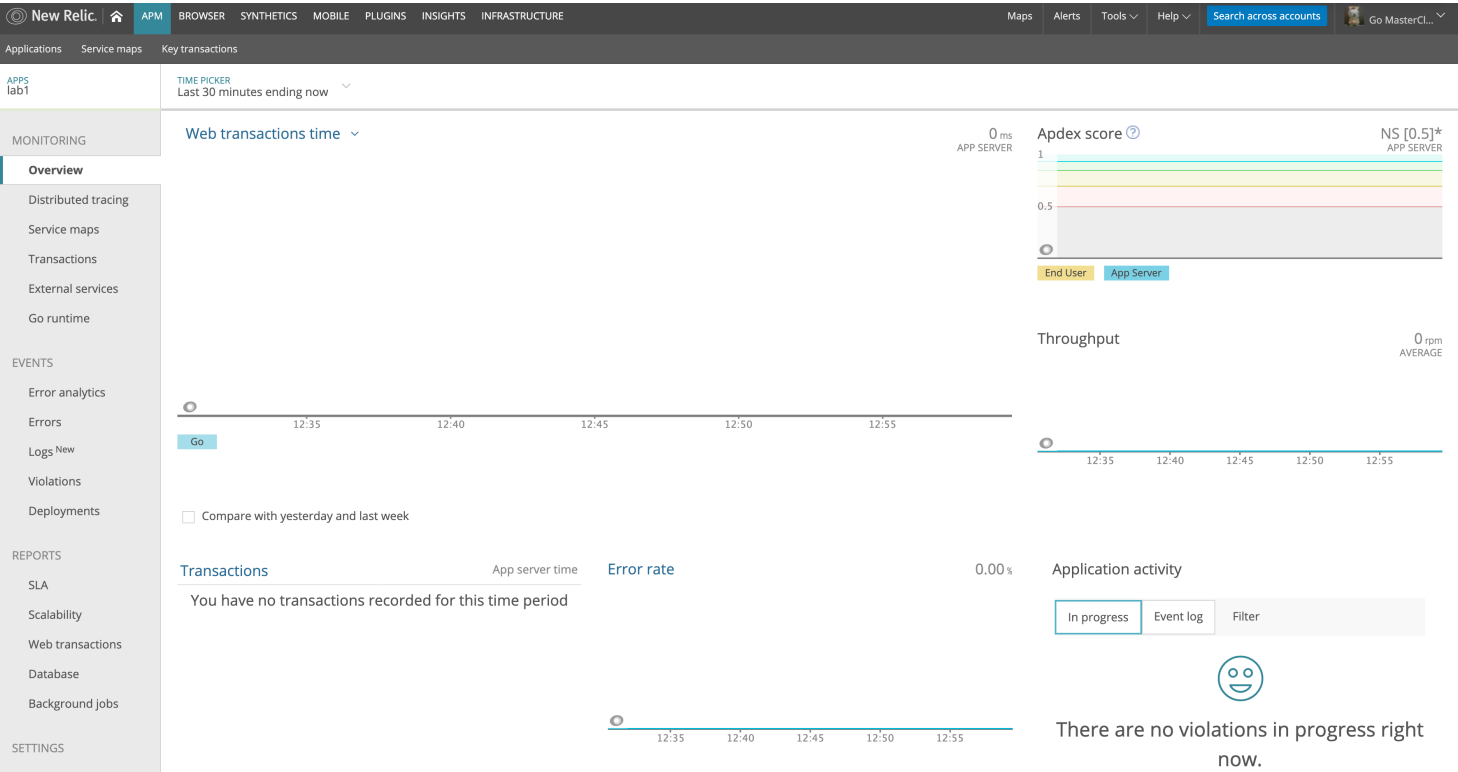
```
newrelic.NewApplication(
    newrelic.ConfigAppName("lab1"),
    newrelic.ConfigLicense(os.Getenv("NEW_RELIC_LICENSE_KEY")),
    func (cfg *newrelic.Config){
        //何か設定する
    },
)
```

さてここまで設定した内容で起動して `http://localhost:8321` にアクセスしてください。必要があればポート番号は変更してください。起動時に `NEW_RELIC_LICENSE_KEY` でライセンスキーを設定するのを忘れないでください。

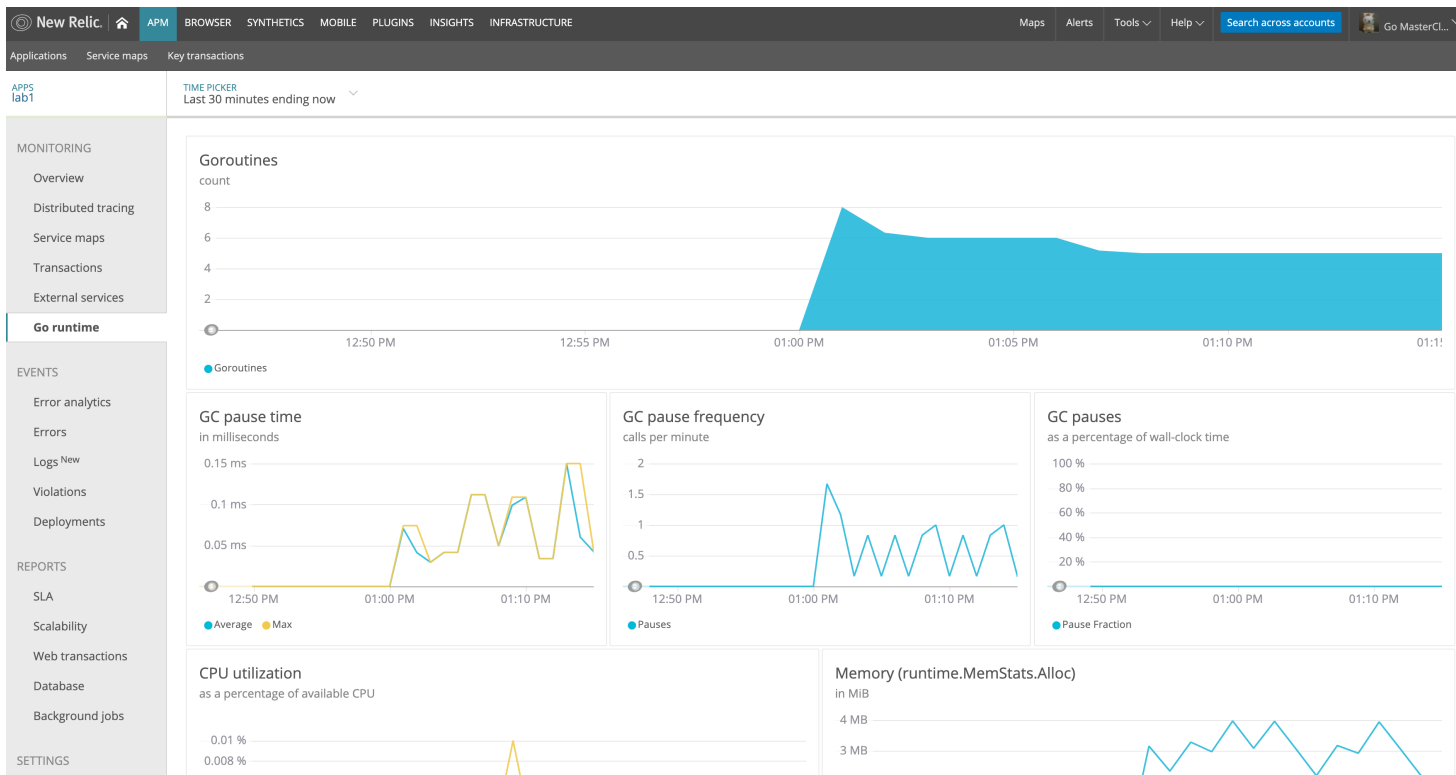
APMのUI(`https://rpm.newrelic.com/accounts/2696663/applications/`)にログインして入ると `lab1` という名前のアプリが表示されているはずです。



`lab1` をクリックするとこの様に表示されます。何も表示されていない様ですがこれで問題ありません。



左側にあるGo runtimeというメニューを開いてください。次の様にCPUやメモリー消費量について記録されているはずです。表示されていれば期待通り動作しています。



表示されていれば次に進んでください。表示されない場合は `./lab1_materials/main.go.task1` のコードを比べてみてください。

エージェントのログ出力

Go Agentの動作確認のためにログを出力することをおすすめします。汎用的な設定方法として、`newrelic.ConfigLogger` で設定できます。引数は `newrelic.Logger` となっており、このインターフェースを実装したログ出力クラスを指定することができます。またライブラリによる出力については[発展編](#)で説明しています。

ここでは便利な関数として `newrelic.ConfigInfoLogger(os.Stdout)` と `newrelic.ConfigDebugLogger(os.Stdout)` を紹介します。それぞれInfoレベルのログとDebugレベルのログを指定した `io.Writer` に出力する関数で、標準出力を指定しています。開発中はDebugレベルに設定することをおすすめします。先ほどのmain関数に追加したところにもう一つ引数を追加します。

```
newrelic.NewApplication(  
    newrelic.ConfigAppName("lab1"),  
    newrelic.ConfigLicense(os.Getenv("NEW_RELIC_LICENSE_KEY")),  
    newrelic.ConfigDebugLogger(os.Stdout),  
)
```

再度起動すると標準出力にログが出力されます。次の様なメッセージを検索してください。この `Reporting to: (URL)` が表示されていればAgentが接続し、データを送信し始めたことを意味しています。

```
(38395) 2020/04/21 18:14:58.163647 {"level":"info","msg":"application connected","context":  
{"app":"lab1","run":"BZlyXXn_xXXsXXXI1x1uwwpenrnQAAsBAAAnIQEAAJX7AgQeLsMIAwAFMy40LjAADEMwMlpRN  
UNQTUQ2UAAEbGFIMQ"}}  
(38395) 2020/04/21 18:14:58.163744 {"level":"info","msg":"collector message","context":{"msg":"Reporting to:  
https://rpm.newrelic.com/accounts/nnnnnn/applications/mmmmmmmmm"}}
```

(オプション) 環境変数による設定

多くの設定項目は環境変数経由で設定することができます。異なる種類のサービスを提供するなど異なる設定で計測したい場合に、同じソースコードのまま設定を変更することができます。この場合、`newrelic.ConfigFromEnvironment` を `NewApplication` の引数に指定します。

設定可能な項目と、対応する環境変数の名前は[godoc](#)に記載されています。ここに引用しておきます。

<code>NEW_RELIC_APP_NAME</code>	sets <code>AppName</code>
<code>NEW_RELIC_LICENSE_KEY</code>	sets <code>License</code>
<code>NEW_RELIC_DISTRIBUTED_TRACING_ENABLED</code>	sets <code>DistributedTracer.Enabled</code> using <code>strconv.ParseBool</code>
<code>NEW_RELIC_ENABLED</code>	sets <code>Enabled</code> using <code>strconv.ParseBool</code>
<code>NEW_RELIC_HIGH_SECURITY</code>	sets <code>HighSecurity</code> using <code>strconv.ParseBool</code>
<code>NEW_RELIC_SECURITY_POLICIES_TOKEN</code>	sets <code>SecurityPoliciesToken</code>
<code>NEW_RELIC_HOST</code>	sets <code>Host</code>
<code>NEW_RELIC_PROCESS_HOST_DISPLAY_NAME</code>	sets <code>HostDisplayName</code>
<code>NEW_RELIC_UTILIZATION_BILLING_HOSTNAME</code>	sets <code>Utilization.BillingHostname</code>
<code>NEW_RELIC_UTILIZATION_LOGICAL_PROCESSORS</code>	sets <code>Utilization.LogicalProcessors</code> using <code>strconv.Atoi</code>
<code>NEW_RELIC_UTILIZATION_TOTAL_RAM_MIB</code>	sets <code>Utilization.TotalRAMMIB</code> using <code>strconv.Atoi</code>
<code>NEW_RELIC_LABELS</code>	sets <code>Labels</code> using a semi-colon delimited string of colon-separated pairs, eg. "Serve"
<code>NEW_RELIC_ATTRIBUTES_EXCLUDE</code>	sets <code>Attributes.Exclude</code> using a comma-separated list, eg. "request.headers.host,request.headers.user-agent"
<code>NEW_RELIC_ATTRIBUTES_INCLUDE</code>	sets <code>Attributes.Include</code> using a comma-separated list
<code>NEW_RELIC_LOG</code>	sets <code>Logger</code> to log to either "stdout" or "stderr" (filenames are not supported)
<code>NEW_RELIC_LOG_LEVEL</code>	controls the <code>NEW_RELIC_LOG</code> level, must be "debug" for debug, or empty for info

最初の計測

APMのUIを開いた時に何も表示されていませんでした。これは繰り返しになりますが、Goではトランザクションの検出をコードで明示的に指定しないとイケないためです。早速、`index` と `hoge` エンドポイントについてトランザクションを検出してみましょう。

トランザクションを設定するに当たって、`NewApplication` の戻り値である `Application` を変数に格納しておきます。また戻り値は二値で、他の関数同様2番目はエラー時に `nil` 以外のオブジェクトを返却されます。エラー処理も追加しましょう。

まず変数を導入します。

```
var (
    app *newrelic.Application
)
```

`NewApplication` の部分を次の様に変えます。

```
var err error
app, err = newrelic.NewApplication(
    newrelic.ConfigAppName("lab1"),
    newrelic.ConfigLicense(os.Getenv("NEW_RELIC_LICENSE_KEY")),
    newrelic.ConfigDebugLogger(os.Stdout),
)

if (err != nil) {
    panic(err)
}
```

この `Application` は `nil` safe であることが[godoc](#)にも書かれています。

そして、`index` 関数の先頭で `app.StartTransaction` を呼び出して、指定した名前でトランザクションを開始します。開始したトランザクションは `End` を呼び出して終了しないといけません。エンドポイントとなる関数が終了するまでをトラン

ザクションとして扱うことがほとんどですので、`defer` を使うことで次の様にかけます。

```
func index(rw http.ResponseWriter, req *http.Request) {
    txn := app.StartTransaction("index")
    defer txn.End()

    time.Sleep(15 * time.Millisecond)
    rw.Write([]byte("Hello World"))
}
```

アプリを起動する前に、**Apdex 値を 0.001 に設定**してください。Apdexのデフォルトは0.5秒でこのままだと15ミリ秒程度のこの処理がトランザクション詳細に記録されません。

The screenshot shows the New Relic APM interface. The left sidebar contains a navigation menu with sections: APPS (lab1), MONITORING (Overview, Distributed tracing, Service maps, Transactions, External services, Go runtime), EVENTS (Error analytics, Errors, Violations, Deployments), REPORTS (SLA, Scalability, Web transactions, Database, Background jobs), and SETTINGS (Application, Alert conditions). The 'Application' setting under SETTINGS is highlighted with a red box. The main content area is titled 'lab1' and has two tabs: 'Application Settings' (active) and 'Server-side agent configuration'. Under 'Application Settings', there are two sections: 'Application alias' and 'Application server'. The 'Application alias' section shows a text input field with 'lab1' and a note: 'Your application still reports as lab1. Name changes are for display purposes only.' The 'Application server' section explains the 'Apdex T' threshold. The 'Apdex T' label is followed by a question mark icon. Below it, a text input field contains '0.01' and is highlighted with a red box, followed by the word 'seconds'. A note below the input field says: 'Please input a decimal or whole number only.' At the bottom of the 'Application server' section is a blue button labeled 'Save application settings'.

New Relic

APM BROWSER SYNTHETICS MOBILE PLUGINS INSIGHTS INFRASTRUCTURE

APPS
lab1

MONITORING

- Overview
- Distributed tracing
- Service maps
- Transactions
- External services
- Go runtime

EVENTS

- Error analytics
- Errors
- Violations
- Deployments

REPORTS

- SLA
- Scalability
- Web transactions
- Database
- Background jobs

SETTINGS

- Application**
- Alert conditions

lab1

Application Settings [Server-side agent configuration](#)

Application alias

Label your application as you would like it to appear in New Relic APM. You can still change the label here without modifying the agent configuration file. Note, changing the UI alias will cause all agents that report under the app identifier to restart themselves.

lab1

Your application still reports as lab1. Name changes are for display purposes only.

Application server

Apdex T is the response time threshold value for [Apdex](#). Apdex T is the response time below which a user is satisfied with the experience. The default Apdex T threshold for an application server is 0.5 seconds. Apdex T applies to web transactions only.

Apdex T ?

0.01 seconds

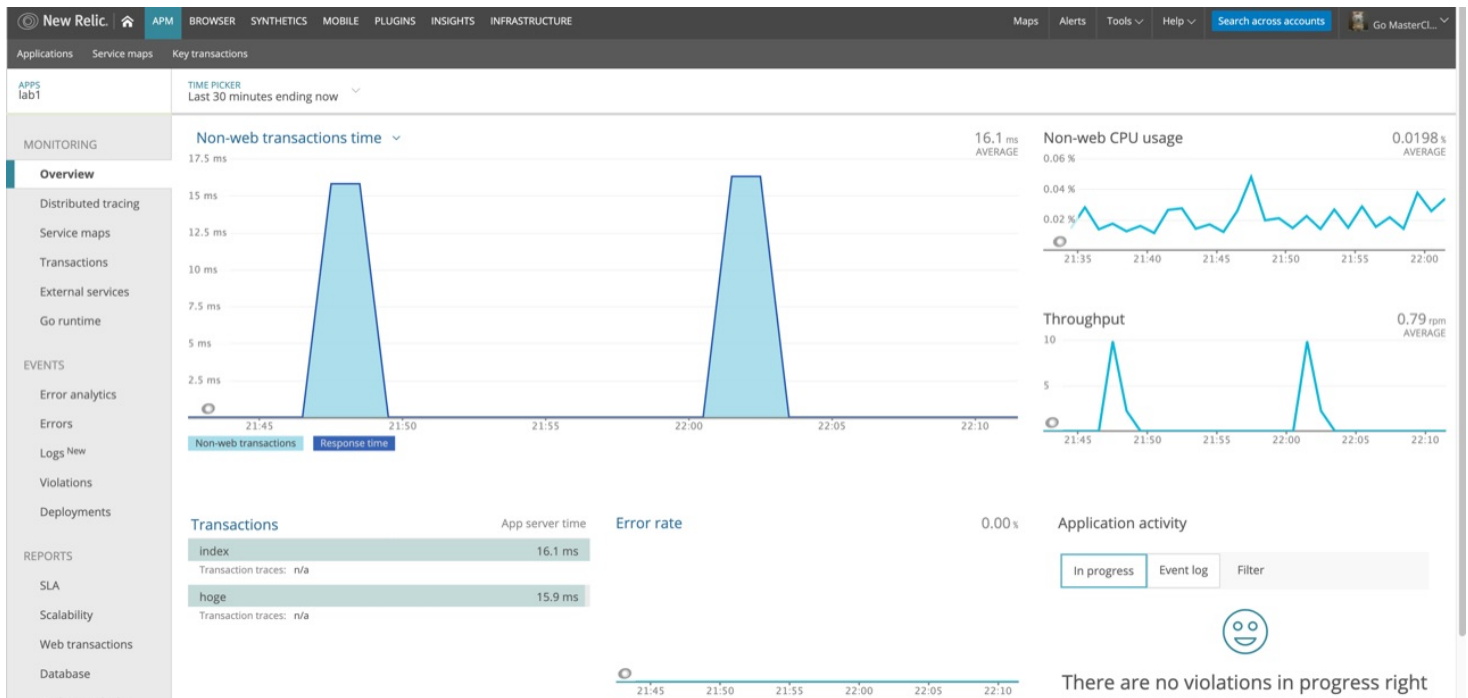
Please input a decimal or whole number only.

Save application settings

起動してアクセスすると、標準出力に次の様なログが出力されるはずです。これがトランザクションとして計測し、データを送信している様子です。

```
(51925) 2020/04/22 20:02:05.967808 {"level":"debug","msg":"transaction ended","context":
{"app_connected":true,"duration_ms":16.111786,"ignored":false,"name":"OtherTransaction/Go/index"}}
(51925) 2020/04/22 20:02:06.126375 {"level":"debug","msg":"transaction ended","context":
{"app_connected":true,"duration_ms":15.060338,"ignored":false,"name":"OtherTransaction/Go/index"}}
```

先ほど何も表示されなかったAPM UIにアクセスすると表示される様になっていることがわかります。



ただし、このままだと表示されている通り"non-Web"トランザクションとして測定されます。non-WebトランザクションはHTTPリクエストに紐づかない処理として計測され、例えばリクエストURLやヘッダーに基づく分析ができなくなります。そこで次の様にコードを追加します。

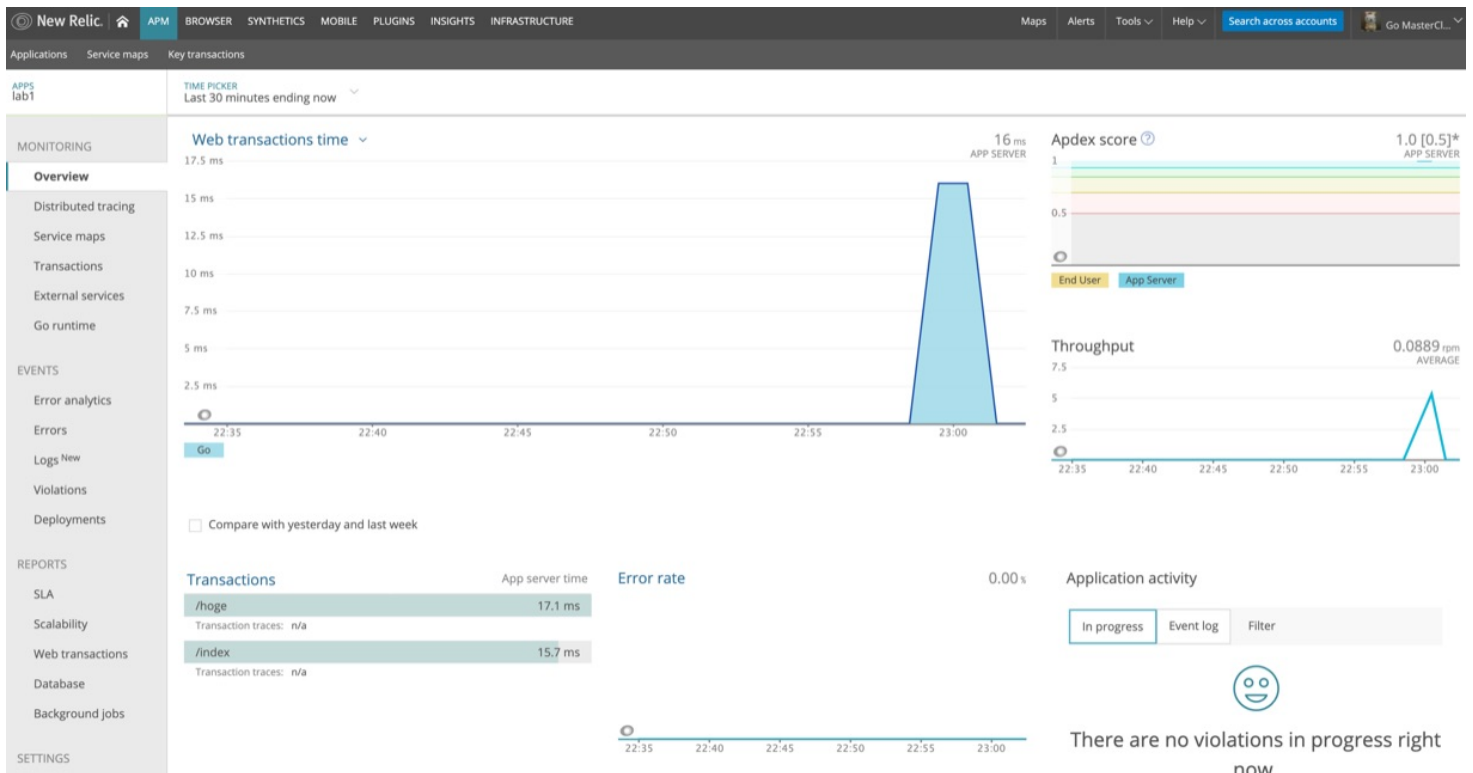
```
func index (rw http.ResponseWriter, req *http.Request) {
    txn := app.StartTransaction("index")
    defer txn.End()

    //以下の2行を追加
    txn.SetWebRequestHTTP(req)
    rw = txn.SetWebResponse(rw)

    rw.Write([]byte("Hello World"))
    time.Sleep(15 * time.Millisecond)
}
```

アプリを起動してアクセスすると、先ほど OtherTransaction というログが WebTransaction に変わっていることがわかります。

```
(52902) 2020/04/22 22:59:49.009751 {"level":"debug","msg":"transaction ended","context":
{"app_connected":true,"duration_ms":15.259633,"ignored":false,"name":"WebTransaction/Go/index"}}
(52902) 2020/04/22 22:59:50.263454 {"level":"debug","msg":"transaction ended","context":
{"app_connected":true,"duration_ms":15.833224999999999,"ignored":false,"name":"WebTransaction/Go/hoge"}}
```

さらにhogeやexternal関数にも同様にコードを追加しましょう。名前はそれぞれ hoge と external とします。

```
func hoge(rw http.ResponseWriter, req *http.Request) {
    //以下2行を追加
    txn := app.StartTransaction("hoge")
    defer txn.End()

    func() {
        time.Sleep(100 * time.Millisecond)
    }()

    time.Sleep(150 * time.Millisecond)
    rw.Write([]byte("hoge"))
}

func external(rw http.ResponseWriter, r *http.Request) {
    //以下2行を追加
    txn := app.StartTransaction("external")
    defer txn.End()

    //以下略
}
```

うまくいかない場合は、 ./lab1_materials/main.go.task2 のコードと比べてください。

カスタム属性や特別なトランザクション

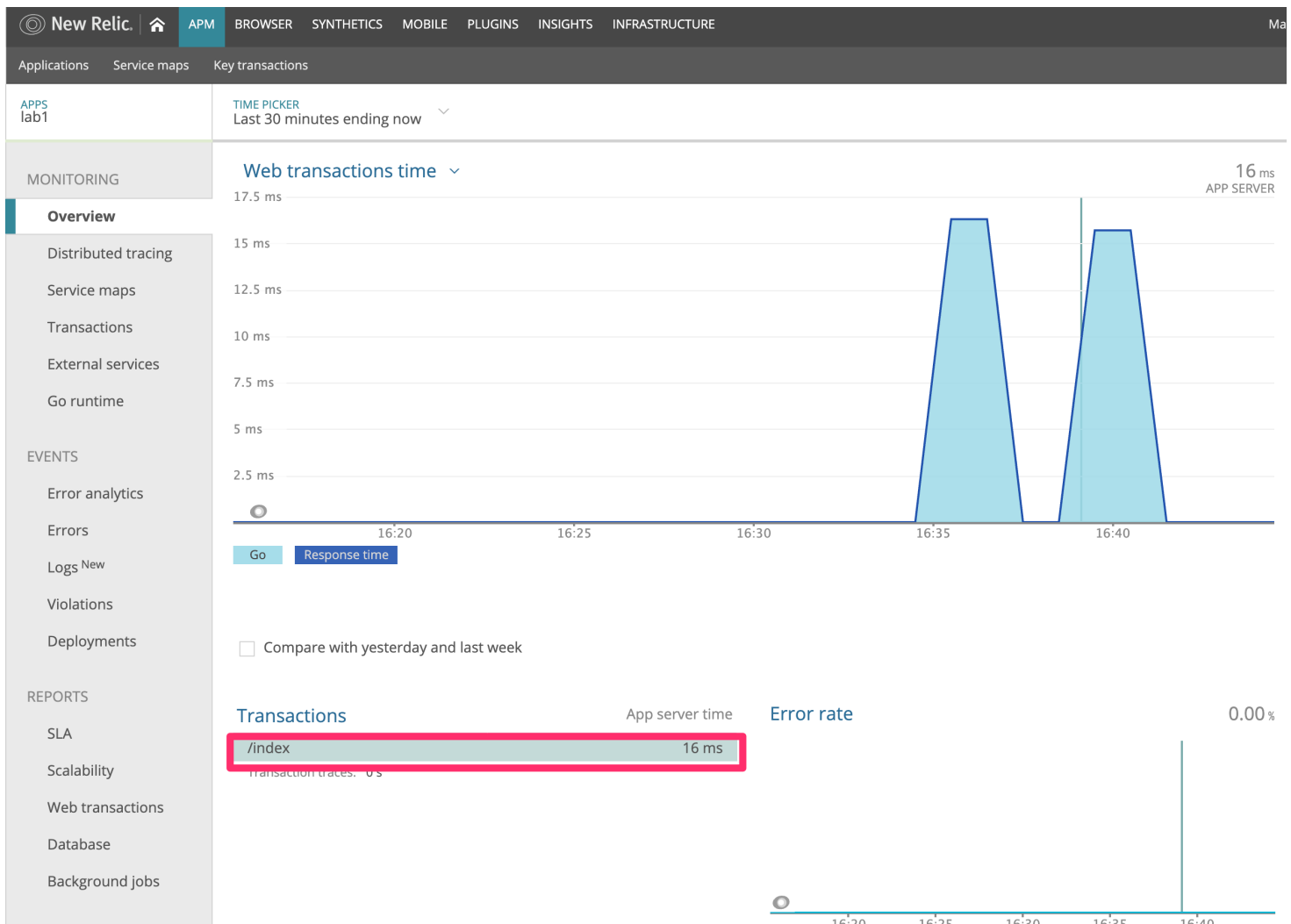
次にトランザクションに追加の属性を設定します。New Relicではトランザクションにキーと値のペアでカスタム属性として情報を追加できます。トランザクションに対して、 `AddAttribute` 関数を呼び出します。今回はクエリ文字列を取得するので次の様に書きます。

```
func index(rw http.ResponseWriter, req *http.Request) {
    txn := app.StartTransaction("index")
    defer txn.End()
    //以下の行を追加
    txn.AddAttribute("customerLevel", req.URL.Query().Get("customerLevel"))

    txn.SetWebRequestHTTP(req)
    rw = txn.SetWebResponse(rw)

    time.Sleep(15 * time.Millisecond)
    rw.Write([]byte("Hello World"))
}
```

起動し <http://localhost:8123/?customerLevel=gold> にアクセスしたあと、APM UIでindexというトランザクションをクリックします。



右下にトランザクショントレースの一覧が出るので一つクリックします。

すると、デフォルトで収集される属性に追加して `customerLevel` という属性が追加されています。

次にハンドルしたエラーをNew Relicに通知します。 `external` 関数でエラー処理をしている部分（2箇所）でTransactionの `NoticeError` を呼び出します。

```

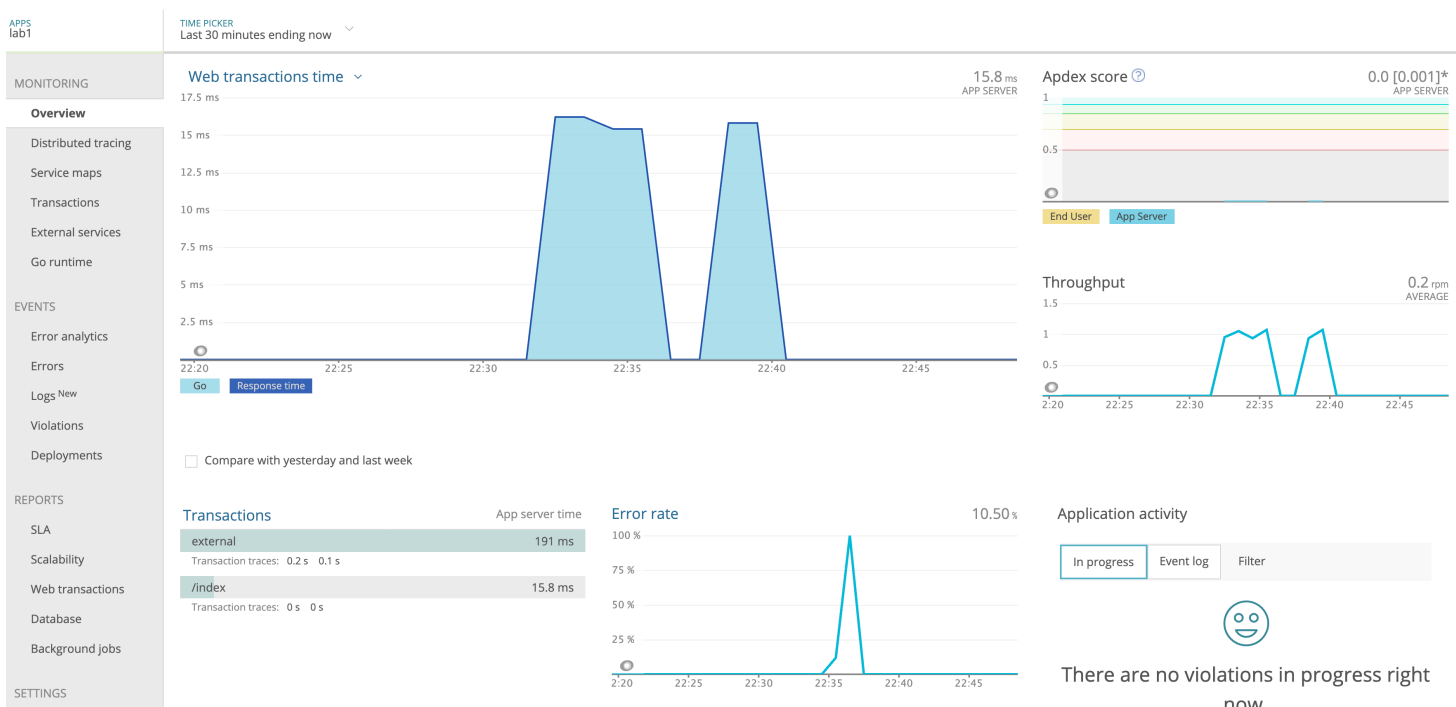
func external(rw http.ResponseWriter, r *http.Request) {
    //略
    req, err := http.NewRequest("GET", url, nil)
    if err != nil {
        //以下の行を追加
        txn.NoticeError(err)
        rw.Write([]byte(fmt.Sprintf("リクエスト作成失敗: %v", err)))
        return
    }

    client := http.Client{}
    resp, err := client.Do(req)
    if err != nil {
        //以下の行を追加
        txn.NoticeError(err)
        rw.Write([]byte(fmt.Sprintf("リクエスト実行失敗: %v", err)))
        return
    }
    resp.Body.Close()
    rw.Write([]byte(fmt.Sprintf("呼び出しステータス: %v", resp.Status)))
}

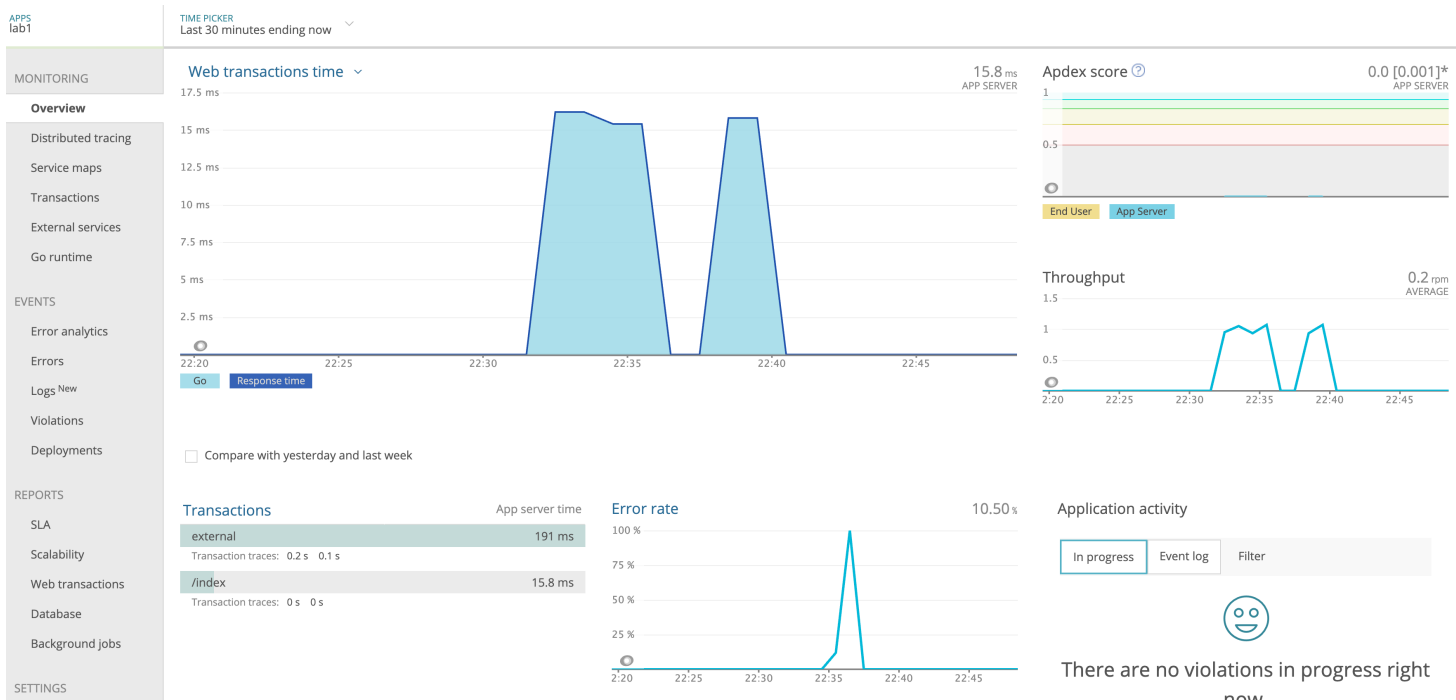
```

起動後、`http://localhost:8123/externa;` にアクセス

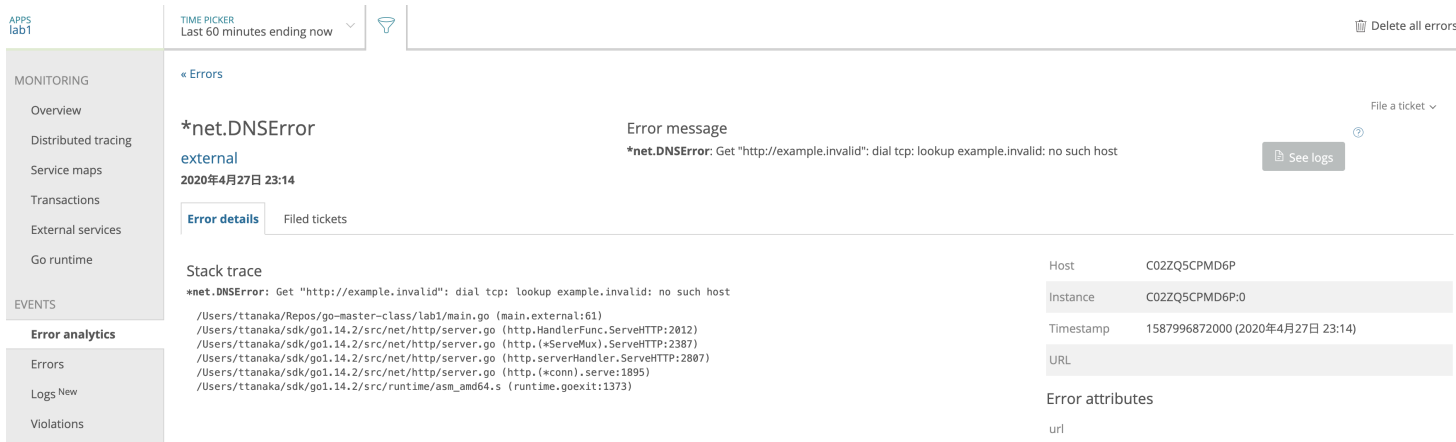
し、外部呼び出しリクエスト実行失敗: `Get "http://example.invalid": dial tcp: lookup example.invalid: no such host` というメッセージが出るまで何度か繰り返します。するとAPM UIの下の方にあるerror rateでエラーが確認できます。



リンクになっている error rate をクリックするとエラーの統計がみられます。



ここでは一つしかありませんが、エラーの種類をクリックすると、1つ1つのエラーの詳細が確認できます。例えばスタックトレースからコードのどの行で発生したかまでわかります。



うまくいかない場合は、`./lab1_materials/main.go.task3` のコードと比べてください。

より簡単に計測する

最初の計測で行った様に、トランザクションとして計測したいそれぞれのメソッドにコードを追加していけば計測は可能です。しかし、数が多いとメンテナンスするのも大変になってきます。より簡単に計測する工夫をしてみます。

`index` や `hoge` 、 `external` といったハンドラー関数を引数にとって、ハンドラー関数を実行する前後でトランザクションを設定する `instrumentHandler` という関数を用意してみましょう。

```
func instrumentHandler(name string, fn func(w http.ResponseWriter, r *http.Request)) func(http.ResponseWriter,
    *http.Request) {
    return func(rw http.ResponseWriter, req *http.Request) {
        txn := app.StartTransaction(name)
        defer txn.End()

        //この行はあとで重要な意味をもつ
        req = newrelic.RequestWithTransactionContext(req, txn)

        txn.SetWebRequestHTTP(req)
        rw = txn.SetWebResponse(rw)
        fn(rw, req)
    }
}
```

この関数を使う場合、main関数の `mux.HandleFunc` の部分は次の様になります。

```
mux := http.NewServeMux()
mux.HandleFunc("/", instrumentHandler("index", index))
mux.HandleFunc("/hoge", instrumentHandler("hoge", hoge))
mux.HandleFunc("/external", instrumentHandler("external", external))
```

さらに、`index`関数などに記載した以下の4行を消します。

```
txn := app.StartTransaction("index")
defer txn.End()

//以下の2行を追加
txn.SetWebRequestHTTP(req)
rw = txn.SetWebResponse(rw)
```

これで、ハンドラー関数内のコード変更は不要になりましたが、代わりに `AddAttribute` などの関数を呼び出すのに `Transaction` にアクセスできなくなります。任意のハンドラー関数およびそこから呼び出された関数内からそのハンドラー関数のトランザクションにアクセスする必要があります。そのために先ほどのコードで「//この行はあとで重要な意味をもつ」と書いた `req = newrelic.RequestWithTransactionContext(req, txn)` というコードにより、`req.Context()` 経由で取得できるようにしていました。例えば `index` 関数内で `AddAttribute` 関数を呼ぶ前に次のコードで `Transaction` を取得します。

```
txn := newrelic.FromContext(req.Context())
txn.AddAttribute("customerLevel", req.URL.Query().Get("customerLevel"))
```

`external` 関数も同様に書き換えます。

さて、`instrumentHandler` 関数を定義する代わりに、`newrelic` が用意している `WrapHandleFunc` という関数を使う方法もあります。これは、`newrelic.Application` と URL パターンとハンドラー関数を引数にとり、ハンドラー関数に対してトランザクションを設定してくれます。この場合、`mux.HandleFunc` の部分は次の様になります。残りの部分はそのまま利用できます。

```
mux := http.NewServeMux()
mux.HandleFunc(newrelic.WrapHandleFunc(app, "/", index))
mux.HandleFunc(newrelic.WrapHandleFunc(app, "/hoge", hoge))
mux.HandleFunc(newrelic.WrapHandleFunc(app, "/external", external))
```

しかし、いずれの方法で `HandleFunc` の引数部分を書き直す必要が出てきます。そこで `replacementMux` というラッパーとなる構造体と `HandleFunc` 関数を用意してみます。

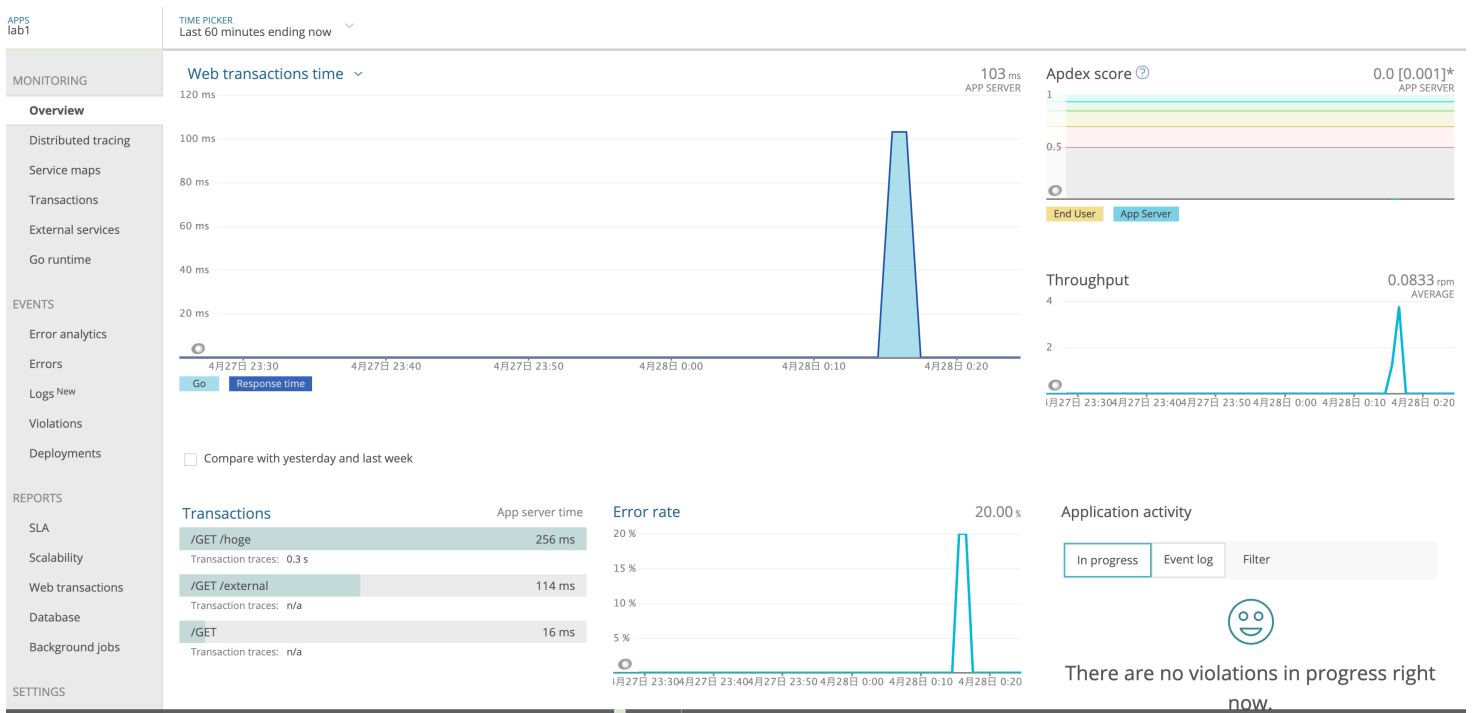
```
type replacementMux struct {
    app *newrelic.Application
    *http.ServeMux
}

func (mux *replacementMux) HandleFunc(pattern string, fn func(http.ResponseWriter, *http.Request)) {
    mux.ServeMux.HandleFunc(newrelic.WrapHandleFunc(mux.app, pattern, fn))
}
```

すると、muxの生成部分は変更する必要がありますが、その代わりに残りの `mux.HandleFunc` は元のままでよくなります。

```
mux := replacementMux{ServeMux: http.NewServeMux(), app: app}
mux.HandleFunc("/", index)
mux.HandleFunc("/hoge", hoge)
mux.HandleFunc("/external", external)
```

アプリを起動してアクセスすれば先ほどまでと同様に計測できていることがわかります。また、最後のケースではトランザクション名を明示的に指定していませんが関数の名前を利用して自動で設定されています。



うまくいかない場合は、`./lab1_materials/main.go.task4` のコードと比べてください。

segmentsの導入

New Relicではトランザクション内でさらに細分化して経過時間を測定したい場合、Segmentというものに分けて計測することができます。hoge 関数内で、無名関数内のsleepをsegment1、もう一つのsleepをsegment2として計測するには次のようにコードを書きます。

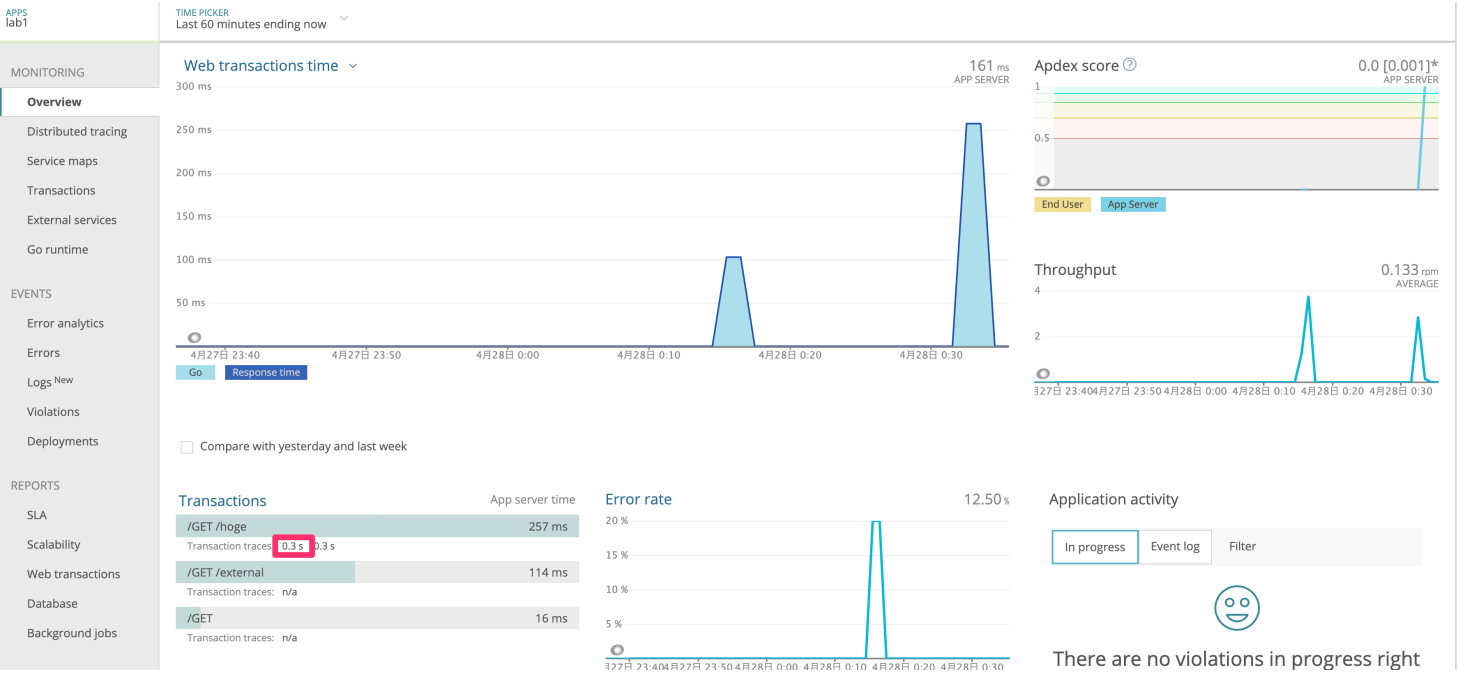
```
func hoge(rw http.ResponseWriter, req *http.Request) {
    rw.Write([]byte("hoge"))

    txn := newrelic.FromContext(req.Context())

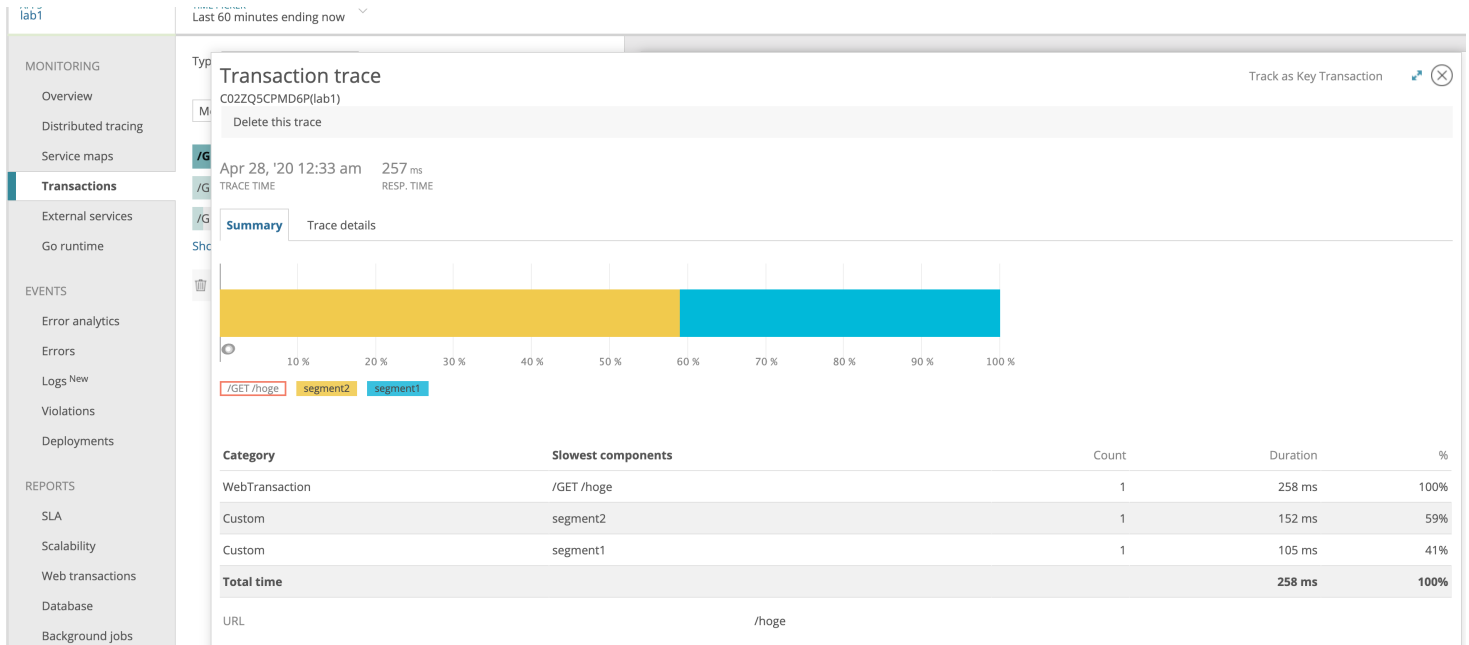
    func() {
        defer txn.StartSegment("segment1").End()
        time.Sleep(100 * time.Millisecond)
    }()

    s2 := txn.StartSegment("segment2")
    time.Sleep(150 * time.Millisecond)
    s2.End()
}
```

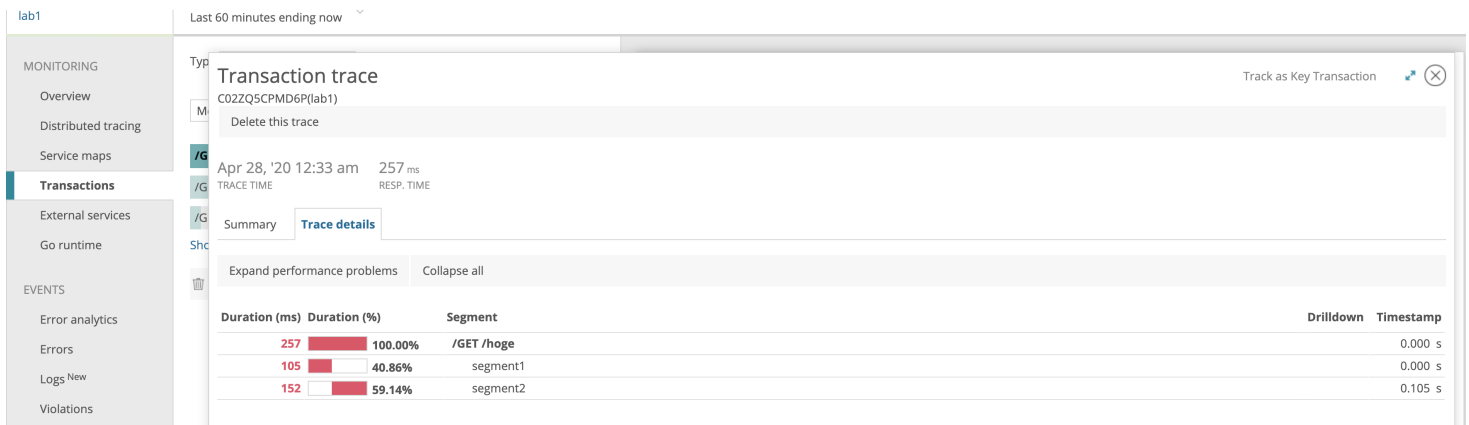
Transaction同様、StartしたSegmentの End を呼び出すことで終了させます。したがって、例えば無名関数内のように、関数全体を1Segmentにしたい場合はdeferを使うことができます。また、そうで無い場合は終了させたいところでEndを呼び出します。またアプリを実行して、 `http://localhost:8123/hoge` にアクセスしてみます。トランザクション詳細を見るために、APM UIのTransactionのところにある GET /hoge の下の秒数をクリックします。この秒数かかった遅いトランザクションの詳細に直接飛べます。



次の図のようにsegmentごとに経過時間が確認できます。



また、Detailsタブでは呼び出し関係もわかります。



うまくいかない場合は、`./lab1_materials/main.go.task5` のコードと比べてください。

外部呼び出し

基礎編の最後にHTTPで外部呼び出ししている箇所の計測を行います。先ほどと同様に外部呼び出しの部分をSegmentとして計測すれば良いのですが、外部呼び出しは呼び出し先のドメインなどの情報を合わせて計測できるようにExternalという特別なSegmentとして計測します。external関数の中でhttp.Clientを生成する前後のコードを次のように記述します。

```
req = newrelic.RequestWithTransactionContext(req, txn)
//Transactionにアクセスする必要がない場合
//req = req.WithContext(r.Context())

segment := newrelic.StartExternalSegment(txn, req)
client := http.Client{}
resp, err := client.Do(req)
segment.End()
if err != nil {
    //略
}
```

`newrelic.RequestWithTransactionContext` はこの外部呼び出しがどのトランザクションから行われたものかを結びつけるための処理です。external関数ではNotifyErrorのためにすでにTransactionを取得しているのでこの関数を使っています

が、Transactionを取得していない場合は、`req.WithContext(r.Context())`でも構いません。

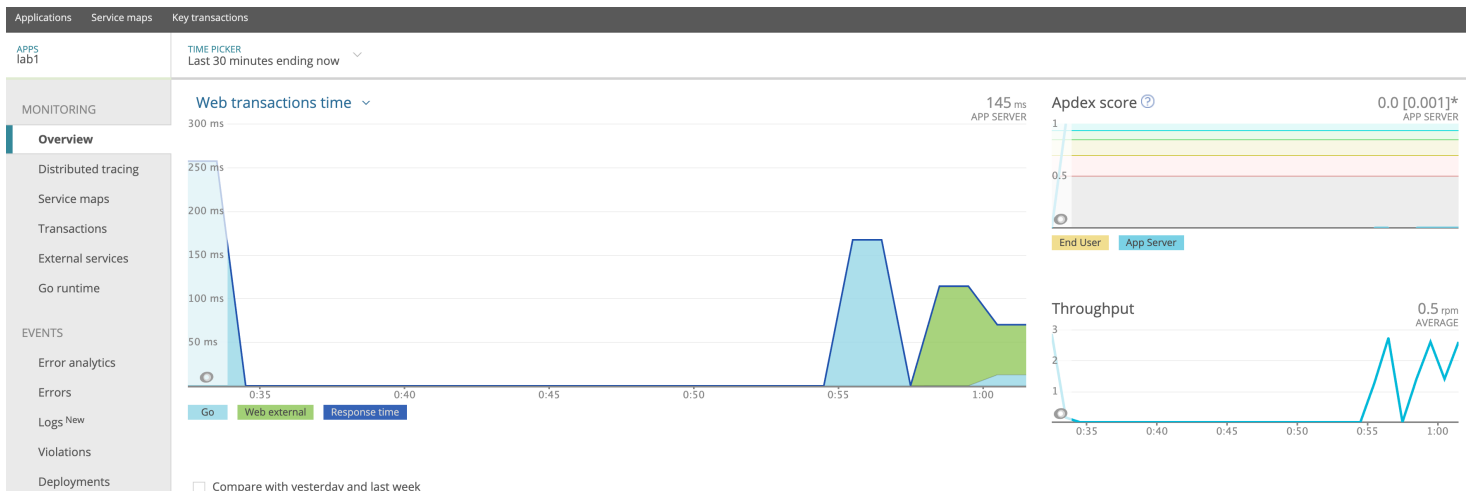
これで外部呼び出しの計測はできるのですが、外部呼び出しの前後でSegmentの開始と終了を記述する必要があります。毎回記述する代わりにClientにRoundTripperを設定することができます。Clientを変数に持っていき、TransportフィールドにRoundTripperを設定します。

```
var (  
    app *newrelic.Application  
    client = &http.Client{  
        Transport: newrelic.NewRoundTripper(nil),  
    }  
)
```

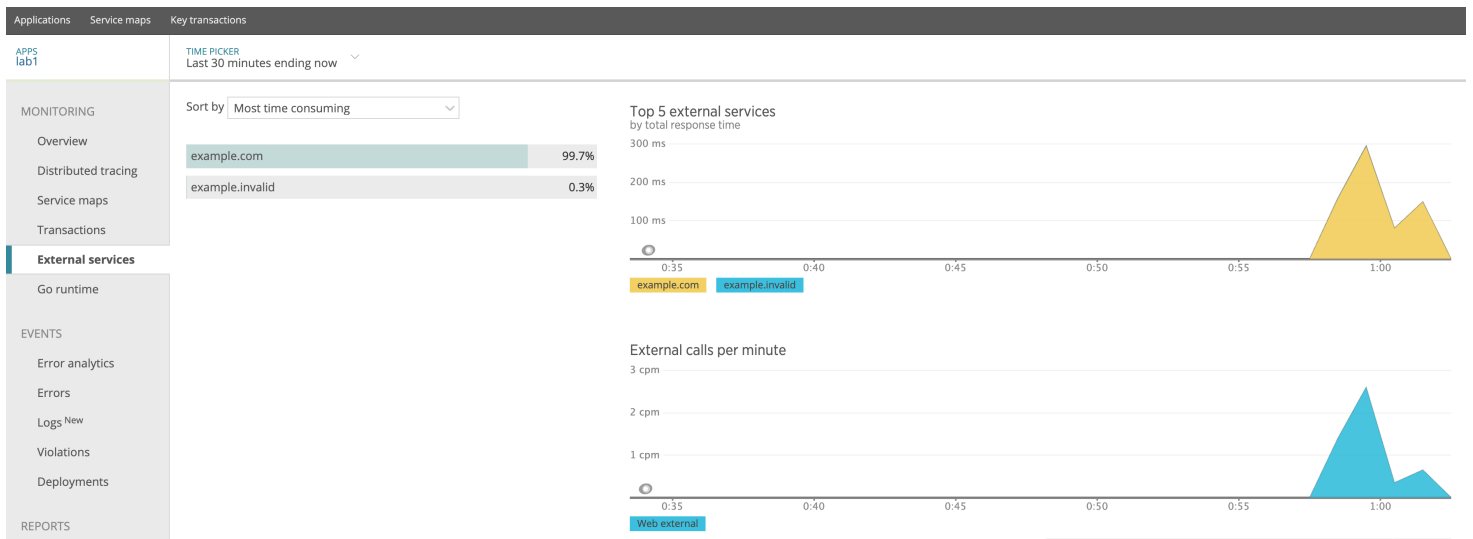
これで、先ほど追加したコードに加えて、clientの生成も不要になります。RequestWithTransactionContextはこの場合でも必要です。

```
req = newrelic.RequestWithTransactionContext(req, txn)  
  
resp, err := client.Do(req)  
if err != nil {  
    //略
```

アプリを起動して、`http://localhost:8123/external` に何度かアクセスすると次のようになります。今までは水色一色だったグラフに緑色の部分が増えました。緑色の部分はアプリ全体の処理時間のうち外部呼び出しにかかっている時間です。



また、External servicesのメニューを選ぶと、通信先のドメインごとに平均処理時間やスループットがわかります。



うまくいかない場合は、`./lab1_materials/main.go.final` のコードと比べてください。
以上で基礎編は終了です。

発展編

ログ出力

Logs in Context

エージェントのログをIntegrationで出力する

リンク

- [Go Agent GitHubリポジトリ](#)
- [Go Agentのインストール](#)
- [Go Agent Getting Started](#)
- [Go Agent Guide](#)
- [Go Agent v3 Integrations](#)
- [Go Agent Configuration](#)
- [Go Agent API Guide](#)
- [Go Agent v3 App Examples](#)
- [Go Agent v3 Technical Documentation](#)
- [Migration Guide to v3](#)